**人との交流を求めて**

　土屋　ひめの

コロナが五類になり、私の住む地域に観光客が戻ってきました。コロナを厳重に警戒していた頃には想像もできなかったほど、生活が明るく豊かになったように感じています。けれど、戻ってこないことや変わってしまったこともあって、私が今感じていることを書きたいと思います。

私は、あけぼの支援学校を卒業して地域のＢ型作業所に就労しています。現在はクッキー作りをしており、食べてくれた方が笑顔になるようにと願いをこめて丁寧に作業をしています。作業は立ち仕事で、さらに衛生面で非常に厳しい環境で作業をしているので、メイクやネイルもできませんが、幸いにもたくさんのお客さんに喜んでいただいて、とてもやりがいを感じています。学生の頃とは違って、様々な年代の利用者さんがいるので、会話をするのがとても楽しく、何気ない言葉のやり取りから、やる気や元気をもらったりしました。レクレーションなどお楽しみ行事では、施設を出て野外でバーベキューをしたり、公園に出かけてみんなで散歩をしたりしました。施設のスタッフさんが色々と企画をして楽しく仕事ができるように配慮してくださるので、日々の生活が楽しく充実していました。

けれどコロナが私たちの生活を大きく変えてしまった部分もあります。マスクを必ず着け、会話は基本的に控える。レクレーションはなくなり、誕生日会や自治会の仕事もなくなりました。施設には、ご高齢の方や持病のある方がいるため、集団感染を防ぐためにも仕方のない事ばかりで、あの頃はみんなが不安で、がまんの毎日でした。就労してからずっと、通院など必要な事以外はなるべく仕事を休まないようにしていましたが、感染防止のために休む日が増えていきました。私の父母は大勢の方と過ごす職場で、また、妹は小学生のため集団生活を送っています。家庭内で、誰がいつコロナに感染してもおかしくない状況だったため、職場にコロナを持ちこまないように通勤を控えることに決めたのです。また、仕事に行った日も、同じ理由で休んでいる利用者さんが多く、さみしい感じでした。クッキーも、観光のお客さまが減ったため、売れ行きが悪くなりました。マスクの着用を、食事以外の時はずっとしていなければならないので、ほほやあごに湿疹ができて赤くなり、何度か皮ふ科を受診する事になりました。けれど私が一番つらいと感じた事は、人とのつながりが、極端に減った事です。支援学校の友人や恩師に会える機会は全くなくなりました。成人式で会おうね、と約束していた同級生の集まりも無くなり、成人式は家族で写真を撮って祝ってもらいました。私の通っていた支援学校は、私のように身体が不自由で持病もあったり、医療施設に入所している生徒も多くいました。入所している友人は、家族との面会もガラス越しにしかできず、お母さんの手に触れることもできないと言っていました。コロナにかかれば、命を落とす事もあるため、仕方の無い事だと分かっていても私の心は沈み、ふさぎこむ事が多くなっていきました。そんな時、母から辻井伸行さんのピアノコンサートに誘われました。屋根が無く開かれたステージだったので感染リスクが低いからと聞いて、出かけてみました。私も５歳からピアノを習っていたので、元々音楽は好きでしたが、そのコンサートでの感動は言葉では表すことができません。目が見えないというハンデを全く感じさせず、音が真珠のようにキラキラ輝いていました。人との関わりが減って、深い海の中で落ちこんでいた私に、辻井さんが光をくれました。私は今、仕事に対する前向きな気持ちを取り戻しました。身辺自立のためにショートステイを利用して、家族以外の方とも交流をしています。大好きなピアノは、これからもずっと弾き続けます。大勢の方々との関わりが、私の人生を豊かにしてくれるのです。